

## 千鳥ヶ淵の環境再生に関する勉強会の議論のとりまとめ

### 1 全体的な事項について

#### (1) 千鳥ヶ淵再生プランについて

事務局から以下のイメージが示された。(第1～3回資料1より抜粋)

##### ①再生プランの枠組み・位置づけ

- 今後の千鳥ヶ淵の環境再生の目標像とその実現に向けた取組を示す構想
- 千鳥ヶ淵の環境再生への参画者の合意に基づき作成。
- 環境省は、プランに沿って取組実施、他の参画者には、各自の役割の中で取組への参加を期待。一般にもプランへの理解と協力を期待。

##### ② 対象範囲、期間等

- 事柄の範囲は、歴史性、象徴性といった全体的な事項、自然環境、景観、利用、水質等。(水質は、千鳥ヶ淵単独を対象とした対策)
- 地理的な範囲は、千鳥ヶ淵及びその周辺。範囲は一律に限定しない。
- 期間は、平成25～27年からの水質改善後数年程度までを想定

##### ③ 想定されるプランの内容

- 千鳥ヶ淵の持つ特性、現状と課題
- 環境の再生・創造の目標像
- 具体的な取組 (自然、景観、利用・環境教育、水質等)

これらに関しては、対象範囲について、民地との関係など範囲を明確にすべきとの意見があった。

#### (2) 再生の目標について

「皇居外苑濠管理方針」では、皇居の象徴性の維持を基調とし、歴史性の継承を図り、これらを損ねない範囲で自然環境保全等を進めとしており、千鳥ヶ淵についてもこの考え方が基本。

一方、勉強会では、千鳥ヶ淵の現状と歴史を概観し、近世以降の観光地としての経緯等、外苑濠の中での特殊性について認識を共有した。

また、目標について、自然、景観といった各要素を一体として捉えるべきという意見がある一方、心地よい環境と自然環境の再生は方向性が異なっていることや、住民にとっては快適な都市づくりが重要との意見もあった。

自然環境、景観等個別事項についての議論について概要は以下の通りである。

## 2 自然環境について

### (1) 目標の考え方

#### ① 全体的な考え方

- 外苑濠が都心の貴重な自然環境であることを踏まえ自然環境の再生を図る。再生は、皇居の象徴性、江戸城の歴史性を損ねない範囲で実施。(事務局、参画者等同様意見有)
- 自然再生では目標とする時代と指標種の置き方が重要。(参画者等)
- 指標は、1つだけではなく、複数あったほうがいい。(参画者等)

#### ② 千鳥ヶ淵が元来人工的な環境であることについて

- 通常自然再生の考え方や目標・指標のたて方の適用は難しい。濠として建造された事実は、自然再生の際に考慮すべき。(参画者等)
- 厳密な自然再生は困難だが、周辺の水辺環境の状況を踏まえ、地域の在来種、種内多様性に配慮した取組を実施したい。(事務局、参画者等同様意見有)

#### ③ 目標とする時代・種

- 千鳥ヶ淵には外来魚もおらず、都内で希少な種も生息。モツゴのように在来の東日本系統も生息。種を持ち込むより、水質や水生植物の再生を図り、既存の種の増加や周辺からの種の入り込みを促すべき。(事務局、参画者等)
- いつの自然に戻すかは、原生の自然ではなく、今生きている人が思いだせる時代を指標とする、1970年代頃が多い。(参画者等)
- 少し以前まで郊外に普通にあったため池のような環境が都心にあるということは大きな意義。(事務局)
- 今いるものを基本とするのは現実的な考えであるが、サクラやホタルではなく、もう少し夢のある、生物多様性に配慮した取組も考えたい。(参画者等)
- 東京周辺の在来魚を見ると昭和40年頃大きく変化。これ以降、在来種が国内移入種や外来種により減少・絶滅。関東低地では遺伝的に同じと考

えて良く、以前いたと思われる種の復元は試みるべき(参画者等)

- 今いるものをベースというのは、議論の出発点。今後の議論。取組のなかで、今いる物だけに限定はしない考え。(事務局)

#### ④ 水辺と陸域の取扱い

- 水辺環境と陸域は性格が異なるため扱いも異なる。水辺は、良好な生態系をめざすが、陸域は、景観や公園としての機能確保を主に、その中で緩衝帯、コリドーとしての機能を確保。(事務局)
- 緑道側堤塘と水中は必ずしも分けなくても良い。景観的に濠とつながりを持たせた方がいい。(参画者等意見、事務局も同意)

### (2) 再生の方法、技術的事項

#### ①再生の手法

- 水質浄化、侵略的外来生物の制御など負の因子を取り除くこと。(参画者等)
- 淡水魚の生息地には水路と池のセットが望ましいが、千鳥ヶ淵はそういう環境ではない。しかし、種の危険分散には利用できる。(参画者等)
- 他濠の底泥からの土壌シードバンクにより再生を試みると良い。(参画者等)
- 千鳥ヶ淵には、水辺植生が成立する遠浅の環境がない。遺構の改変はできないので、浮魚礁設置が考えられる。(参画者等)

#### ②外来生物、コイ、ハス・ヒシ対策

- 食圧の高いコイとザリガニは水生植物に対しても在来魚の回復のためにも、除去する必要(参画者等)
- ハス・ヒシは富栄養化した池の共通の出現種。特にハスは水面を覆って沈水植物や魚類の生育生息を妨げるので取り除いた方がいい。(参画者等)
- 千鳥ヶ淵にハスが繁茂していたという歴史的資料はないが、排除については合意形成が必要。(事務局)

#### ③ホタル

- 千鳥ヶ淵の隣の牛ヶ淵には、ヘイケボタルが生息。由来は不明で、現在、遺伝子調査中。(事務局)
- 観光の観点から、千鳥ヶ淵の一部でホタルが飼えないか。(参画者等)
- ホタルは、再生のわかりやすい結果となりうるが、同種でも遺伝的に異なる

る国内外来種の放流は生物多様性の視点から問題(事務局、参画者等)。

- 現在外苑濠に生息するホタルであっても、ホタルの増殖だけを目指すのではなく、濠の生態系全体の再生を目指すべき。(事務局)

### (3) 再生計画の実施、情報提供、合意形成

- 自然環境の改善は、景観、利用等に対し単純に改善とは言えない変化も及ぼす可能性(濠の水の色、コイの扱いなど)があり合意形成が重要(事務局)
- 再生に関わる人の将来像や夢をある程度共有する事が重要。誰のための自然を再生し、人々が何を望んでいるか考えるべき。外苑では、生態系サービスのうち文化的サービスが重視されている場所。(参画者等)
- 里地・里山の維持管理についても参考になる(参画者等)。
- 取組の進捗度の点検とそのフィードバックが重要(参画者等)
- (マスメディアの参画者として)サクラやホタルなどわかりやすいところから具体的に計画が進んでいけばと思う。(参画者等)

## 3 景観、サクラについて

### (1) 景観

- 景観は、見る人の状況に左右されることを踏まえ、景観利用の実態把握(を進め、そこから改善点の有無を検討。(事務局)
- 景観は合意形成のあり方が問題。(参画者等)
- 景観の特性上、濠水面のみならず周辺地域や利用動線を含め議論(事務局)
- 移動しながらの動的な景観に対する視点からの検討も重要。(事務局)
- 水質や自然の再生に伴い景観が変化する可能性。既存の景観への配慮と新しい景観への受容の両面で認識の共有が重要。(事務局)
- 周辺街路の景観要素との調整も望ましい。(参画者等)

### (2) サクラ

#### ①千鳥ヶ淵におけるサクラの位置づけ、歴史的経緯

- 千鳥ヶ淵のサクラは、明治以降の歴史や文化的背景があり、桜の名所として評価されるが象徴性や歴史的景観への調整が必要。(事務局)
- 千鳥ヶ淵周辺のサクラが現在のようになったのは、昭和30年代末以降で比較的新しい。(参画者等)

- 過去の千鳥ヶ淵周辺の管理者や整備内容、意図の変遷を整理・把握すべき。現在の千鳥ヶ淵のサクラのイメージに対して、事実がどうだったか認識を共有することが議論を進めるために必要。（参画者等）
- 歴史的に、どの時代をターゲットにするのかも合意形成の視点。（参画者等）
- 千代田区等で取組が進められており、これをベースとして検討。（事務局）
- 樹種の選択に特化した話をすると日本人の嗜好性、文化論につながりかねないという慎重論が関係者からあった（事務局）。
- 今後樹種をどういう論理で植栽するかを考えるために、過去の経緯を調べて景観改善のためのサクラ植樹の歴史の文脈を引き継いでいることが言えればいい。（参画者等）
- ソメイヨシノは人工的で自然とかけ離れているという意見があるが一般のソメイヨシノのイメージと樹種変更は扱いが難しい問題。（参画者等）

## ②老木化への対応

- 現在のサクラは老木化による樹勢の低下や樹木の成長による鬱蒼とした景観への変化などの問題が存在。改善のために、部分的には伐採・整理の必要性、後継樹や植栽場所の検討が必要。合意形成が重要。（事務局）
- サクラ老木はあと10年ほどで枯れてしまうため「区の花さくら再生計画」をたてているが、考え方や位置づけをどうするのかは大きな問題。（参画者等）
- サクラ老木伐採は不可欠だが、反対意見がある。（参画者等）
- 堤塘のサクラは伐採・伐根の必要があっても遺構保存の観点で実施が難しい。ナラタケ菌対策の面からも、今後、堤塘へのサクラ植栽は難しい。（事務局）

（以下は、第3回勉強会后議論内容を取りまとめ）

### 4 利用、環境教育について

- (1) 利用
- (2) 環境教育・情報提供

### 5 水質

### 6 その他の論点について